

接続表現のジャンル別出現頻度について

石黒 圭・阿保 きみ枝・佐川 祥予・中村 紗弥子・劉 洋

要旨

本研究は、ジャンル別のコーパスを用いて、接続表現の使用実態を調査することを目的としたものである。対象としたジャンルは、新聞の社説、新聞のコラム、学術論文、エッセイ、小説、シナリオである。調査は、①総文数にたいして何%ぐらい接続表現が用いられているか、②個々の接続表現の形式がそれぞれいくつ使われているか、という二つの観点からおこない、接続表現の多寡や接続類型に現れる各ジャンルの特徴を考察した。

キーワード：接続詞、出現頻度、文体、ジャンル、コーパス

1 本調査の目的

1.1 接続表現の規定

本調査は、談話展開の指標として機能している接続表現をジャンル別に概観し、どのような接続表現がいくつぐらい使われているのか、その出現頻度を調べることを目的としたものである。

接続表現とは、いわゆる接続詞のことで、おもに文頭に立ち、先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現の総称である。それならば、接続詞という名称を採用すればよいようなものであるが、本稿ではその名称は避ける。接続詞は品詞論上の概念であり、隣接する品詞との境界線を引くのに厳密な議論を必要とするからである。

たとえば、「とくに」や「さらに」が接続詞なのか副詞なのかということは、その判断がきわめて難しい¹。また、接続詞という名称を用いると、「それにもかかわらず」や「換言すると」のような接続句が入るかどうか議論の対象になりかねない。そこで、本稿では、佐久間（1990）（1992）、日本語記述文法研究会（2009）などを参考にし、接続表現という名称を用いることにする。

接続表現は、市川（1978）の接続語句に対応するもので、独立した要素どうしを結びつける接続詞、および文法化の進んだ接続詞的表現を指す。接続表現という場合、複文の接続助詞も含めて考える立場もあるが、本稿では文を超えるレベルで働くもののみを接続表現として調査の対象にする。

¹ 「とくに」や「さらに」は厳密には副詞であり、文頭に立って文の接続関係を問題にしているときに接続詞のように見えると論者自身は考えている。いわば、統語論上の接続詞にたいする語用論上の接続詞とも言えるだろうか。接続詞と副詞の連続性については、市川（1965）、中村（1973）、工藤（1977）を参照のこと。

1.2 接続表現の頻度調査の意味

接続表現のつく文というのは、一般に思われているより頻度が低いことが多い。かなり多いと見られる講義の談話でも、全文数にたいする割合は36.9%であり(石黒 2007)、全体の3分の1強である。書き言葉では、多くの場合10%台であり、10%を切る文章も少なくない。つまり、接続表現のつかない文が無標であり、接続表現のつく文には特別な意味があると考えたほうがよい。そうしたことは接続表現を数えてみて初めて気がつくことである。

また、どのようなタイプの接続表現がどのようなジャンルで頻出するかも、重要な問題となる。接続表現は文章・談話のジャンルによって大きな影響を受ける。また、接続表現の接続類型別の偏りを見ることによって、その文章の特徴や特有の論理展開が見えてくるようになる。

2 本調査の概要

2.1 コーパスの概要

本調査では、以下のようなコーパスを用いた。

【新聞の社説】

- ・『毎日新聞』朝刊「社説」2001年1月1日～2005年12月31日(5年分)

【新聞のコラム】

- ・『毎日新聞』朝刊「余録」2001年1月1日～2005年12月31日(5年分)

【論文】

- ・『一橋論叢』²日本評論社、2004年4月号～2005年3月号(131巻4号～6号、132巻1号～6号、133巻1号～3号:12ヶ月分)

【エッセイ】

- ・日本エッセイスト・クラブ編(2001)『'01年版ベスト・エッセイ集 母のキャラメル』文藝春秋
- ・同(2002)『'02年版ベスト・エッセイ集 象が歩いた』文藝春秋
- ・同(2003)『'03年版ベスト・エッセイ集 うらやましい人』文藝春秋

² 『一橋論叢』は、社会科学を専門とする月刊の学術雑誌。商学部(5月、11月)、経済学部(6月、12月)、法学部(7月、1月)、社会学部(8月、2月)、言語社会研究科(9月)、人文・自然科学(3月)がそれぞれ特集号を担当する。なお、4月は新入生向けの特集号(学問への招待)、10月はテーマ別の特集号(今回の調査のテーマは「福田徳三とその時代」)である。1931年1月に創刊され、2006年3月をもって廃刊となった。

- ・同(2004) 『'04年版ベスト・エッセイ集 人生の落第坊主』 文藝春秋
- ・同(2005) 『'05年版ベスト・エッセイ集 片手の音』 文藝春秋

【小説】

- ・『新潮文庫の100冊』1995年、CD-ROM版
- ・『新潮文庫の絶版100冊』2000年、CD-ROM版

【シナリオ】

- ・シナリオ作家協会 年鑑代表シナリオ集編纂委員会編(2003) 『'02年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会
- ・同(2004) 『'03年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会
- ・同(2005) 『'04年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会

なお、参考までに、石黒(2007)で論じた講義の接続表現の結果も示す。対象とした講義は、文章表現論(30代の男性教員)1本、レトリック論(30代の女性教員)1本、日本文学(40代の男性教員)3本、日本語学(50代の男性教員)3本、発達心理学(50代の女性教員)3本である。いずれも学部生を対象とした人文科学系の講義である。

2.2 接続表現の認定方法

接続表現は、石黒(2008)の索引に収録されている接続詞³の範囲内で調査した。石黒(2008)は、市川(1978:89-93)の接続語句、田中(1984:172)、佐久間(1992:16)の接続表現のリストを参考に、現在流通していると考えられる接続表現を、ジャンルにかかわらず収録したものである。ただし、本稿の執筆にあたり、再度リストを検討したところ、接続表現として認定しがたいものが混入する一方、比較的頻度が高いと見られる接続表現がいくつか抜け落ちていたので、それらは削除・補完してある。具体的には次の137種である。

³ 石黒(2008)は一般書であるため、本稿で言う接続表現を、一般の読者になじみのある接続詞という名称で言及している。

表1 接続表現一覧

あるいは	じゃなくて	それはさておき	というのは*
あと	すなわち	そんなふう*	というのも*
いいかえると*	すると	第一に*	というより*
以上*	そうしたら*	第二に	とくに*
いずれにしても	そうして	第三に	ところが
いずれにしろ	そうしないと	第四に	ところで
いってみれば	そうすると	だが	どちらにしても*
一方*	そうそう	だから*	とにかく*
いな(否)	そうではなく*	だからこそ	とはいもの*
いわば	そこで	だからといって	とはいえ*
おまけに	そして	だけど*	とりわけ*
かえって	そのうえ	ただ	なお*
かくして	そのかわり*	ただし	なかでも*
かわりに	そのくせ	だって	なぜかという*
換言すると*	その結果*	たとえば	なぜなら*
ぎゃく(逆)に*	その後*	だとすると*	なにしろ
具体的には	そのため	他方*	なにせ
結局*	そのために*	ちなみに	にもかかわらず*
けど*	そのように*	つ(次)いで	はじめに*
けれども*	それが	ついでに*	反対に*
こうして	それから	つぎに*	反面*
ここで	それで	つづいて*	ひとつめに*
こと(殊)に	それでこそ	って	ふたつめに
このように*	それでは*	つまり*	まず*
こんなふうに*	それでも	で*	また
最後に*	それとも	ていうか*	または
最初に*	それなので*	ですが	またまた
さて	それなのに*	ですから	みつつめに
さもないと	それなら*	ですけど*	むしろ
さらに*	それに	では	もつとも
しかし	それにくわえて	でも	ゆえに*
しかしながら	それにしても	と	ようするに
しかも	それにたいして*	というか	よう(要)は
したがって	そればかりか	ということで*	よって
じゃあ			

表記については、異表記も採用している。たとえば、「いいかえると」でいえば、「いいかえると」のほかに、「言い換えると」「言い替えると」「言いかえると」なども含めて考えている。

「それが」「そこで」のような指示表現との境界が問題になるもの、「また」「もっとも」のような副詞との境界が問題になるもの⁴は、用例ごとに意味を考え、指示表現としてしか解釈できないもの、副詞としてしか解釈できないものは除外した。

また、類似の形式があるもの（表中で*をつけたもの）の採用・非採用の基準は以下のとおりである。

「いいかえると」：「いいかえれば」も含む。

「以上」：「以上は」は除く。

「一方」：「一方で」「一方では」も含む。「一方に」「一方は」は除く。

「換言すると」：「換言すれば」も含む。

「ぎゃくに」：「ぎゃくは」「ぎゃくにいうと」「ぎゃくにいえば」は除く。

「結局」：「結局は」も含む。

「けど」：「けども」も含む

「けれども」：「けれど」も含む。

「このように」：「このようにして」も含む。

「こんなふうに」：「こういうふうに」も含む。

「最後に」：「最後」も含む。「最後は」「最後には」は除く。

「最初に」：「最初」も含む。「最初は」「最初には」は除く。

「さらに」：「さらには」も含む。

「そうしたら」：「そしたら」も含む。

「そうではなく」：「そうでなく」「そうではなくて」「そうでなくて」「そうじゃなく」「そうじゃなくて」も含む。

「そのかわり」：「そのかわりに」も含む。

「その結果」：「結果」「結果として」「その結果として」も含む。

「その後」：「その後に」「その後は」「その後も」は除く。

「そのために」：「そのためには」「そのためにも」も含む。

「そのように」：「そのようにして」も含む。

「それでは」：「それじゃあ」も含む。

「それなので」：「なので」も含む。

「それなのに」：「なのに」も含む。

⁴ 「また」が「もう一度」の意味になったり、「もっとも」が「一番」の意味になったりするようなものは除いたということである。

- 「それなら」:「それならば」も含む。
- 「それにたいして」:「それにたいし」「にたいし」「にたいして」も含む。
- 「そればかりか」:「ばかりか」も含む。
- 「それはさておき」:「さておき」も含む
- 「そんなふうに」:「そういうふうに」も含む。
- 「第一に」:「第一には」も含む。「第一は」は除く。(「第二に」以下も同様)
- 「だから」:「ですから」は除く。
- 「だけど」:「だけれど」「だけれども」「だけれども」も含む。
- 「だとすると」:「だとしますと」「そうだとすると」「そうだとしますと」も含む。
- 「他方」:「他方で」「他方では」も含む。「他方に」「他方は」は除く。
- 「ついでに」:「そのついでに」は除く。
- 「つぎに」:「そのつぎに」は除く。
- 「つづいて」:「それにつづいて」は除く。
- 「つまり」:「つまりは」も含む。
- 「ていうか」:「てゆうか」「てゆっか」「てか」も含む。
- 「で」:「んで」も含む。
- 「ですけど」:「ですけれど」「ですけども」「ですけれども」も含む。
- 「ということで」:「ていうことで」「てことで」も含む。
- 「というのは」:「ていうのは」も含む。
- 「というのも」:「ていうのも」も含む。
- 「というより」:「ていうより」も含む。
- 「とくに」:「とくには」は除く。
- 「どちらにしても」:「どっちにしても」「どっちにしろ」「どっちにせよ」も含む。
- 「とにかく」:「ともかく」も含む。
- 「とはいうものの」:「というものの」も含む。「そうはいうものの」は除く。
- 「とはいえ」:「とはいっても」「そうはいても」は除く。
- 「とりわけ」:「わけても」は除く。
- 「なお」:「なおも」「なおさら」は除く。
- 「なかでも」:「そのなかでも」も含む。
- 「なぜかという」と:「どうしてかという」とは除く。
- 「なぜなら」:「なぜならば」も含む。
- 「にもかかわらず」:「それにもかかわらず」も含む。
- 「はじめに」:「はじめ」も含む。「はじめは」「はじめには」は除く。
- 「反対に」:「反対は」「反対には」は除く。
- 「反面」:「その反面」「反面で」「反面では」も含む。

「ひとつめに」:「ひとつめには」も含む。「ひとつめは」は除く。(「ふたつめ」以下も同様)

「まず」:「まずは」も含む。

「ゆえに」:「それゆえ」「それゆえに」も含む。

なお、今回の調査では、検索の便宜上、文頭にあるもののみを対象としている。「私は、しかし、その意見には賛成できない」「だが、しかし、悲惨な現状を放置しつづけてよいのだろうか」の「しかし」はいずれも検索の対象とはしていない。

3. 本調査の結果と考察

3.1 総文数にたいする接続表現の出現頻度

総文数にたいする接続表現の出現頻度を示す。

表 2 総文数にたいする接続表現の出現頻度

ジャンル	総文数	接続表現数	割合 (%)
社説	99,514	12,156	12.2%
コラム	36,527	2,895	7.9%
論文	19,705	5,020	25.5%
エッセイ	17,952	2,365	13.2%
小説	730,510	75,709	10.4%
シナリオ	38,984	1,186	3.0%
講義 (参考)	6,717	2,481	36.9%

ジャンルによる多寡が明確に出ている。もっとも多いのが参考資料による講義で、総文数の3分の1以上に接続表現が付加されている。つぎに多いのが論文で、総文数の約4分の1に接続表現がついている。論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が接続表現と相性がよい様子が見られる。

一方、それ以外のジャンルは、接続表現の頻度がさほど高くない。対話を中心に構成されるシナリオの約3%は例外としても、社説、コラム、エッセイ、小説がいずれも10%前後であるというのは、一般の予想を下回る頻度ではないだろうか⁵。接続表現がつくこと自体が有標であるということがこの数字からうかがわれる。

⁵ 本稿で接続表現として扱っているのは、すでに示したとおり、137種に限定しており、古い形式(「けだし」「なかんずく」など)や接続詞的に働いている非慣用的な形式(「詳しく言うと」「別の面から見ると」など)が除かれている。また、文頭にない接続表現も含まれてはいない。そのため、広義の接続表現の実数はこれよりも若干増えると考えられる。

3.2 接続表現の種類別出現頻度

出現頻度順に上位30位まで、接続表現の種類別出現頻度をジャンルごとに示す。

表3 接続表現の種類別出現頻度

	社説	出現数		コラム	出現数		論文	出現数
1	しかし	2942	1	だが	667	1	しかし	700
2	だが	1752	2	しかし	259	2	また	488
3	また	821	3	ただ	171	3	そして	305
4	さらに	582	4	だから	96	4	さらに	233
5	一方	494	5	もともと	91	5	たとえば	204
6	ところが	471	6	でも	82	6	つまり	195
7	ただ	420	7	さて	76	7	すなわち	194
8	しかも	378	8	ところが	73	8	したがって	189
9	まず	317	9	では	67	9	まず	155
10	とくに	246	10	それなのに	66	10	そこで	113
11	にもかかわらず	234	11	つまり	62	11	一方	112
12	そのために	227	11	一方	62	12	だが	106
13	それでも	221	13	そして	61	13	このように	96
14	そこで	212	13	それでも	59	14	ただし	94
15	そして	199	15	そこで	54	15	なお	90
16	たとえば	193	16	とくに	54	16	しかしながら	85
17	その結果	172	17	ちなみに	50	17	つぎに	81
18	それなのに	114	18	まず	49	17	他方	81
19	むしろ	105	19	その後	47	19	とくに	68
20	とりわけ	103	19	また	43	20	ここで	63
21	だから	99	21	たとえば	43	21	なぜなら	58
22	では	94	22	さらに	41	21	ゆえに	58
23	第二に	82	23	それにしても	29	23	では	57
24	なかでも	81	24	しかも	28	24	最後に	52
25	その後	78	24	ただし	28	25	ところで	48
26	結局	77	26	こうして	25	26	その結果	47
27	第一に	73	26	とはいえ	25	26	さて	47
28	だからといって	72	26	ぎゃくに	25	28	こうして	46
29	それが	64	29	すると	24	29	そのため	43
30	つまり	63	30	いわば	23	29	それにたいして	43

接続表現のジャンル別出現頻度について

	エッセイ	出現数
1	しかし	346
2	そして	249
3	だが	140
4	ところが	108
5	だから	94
6	また	83
7	でも	67
8	つまり	55
9	たとえば	52
10	そこで	45
11	しかも	44
12	さて	42
13	すると	38
13	ところで	38
14	まず	36
16	けれども	35
16	それでも	35
18	では	31
19	ただ	30
20	結局	29
21	さらに	28
21	その後	28
23	したがって	27
24	もともと	26
25	とくに	25
26	こうして	24
27	一方	23
27	それで	23
29	とにかく	21
30	それに	20

	小説	出現数
1	しかし	15464
2	そして	10788
3	だが	3553
4	それから	3051
5	すると	2755
6	でも	2234
7	だから	2226
8	ただ	2086
9	また	2034
10	それで	1918
11	それに	1917
12	ところが	1642
13	そこで	1283
14	つまり	1147
15	そうして	1134
16	しかも	1096
17	とにかく	1073
18	けれども	1000
19	それでも	846
20	もともと	812
21	で	614
22	それにしても	540
22	ところで	540
24	たとえば	517
25	ことに	509
26	したがって	487
27	そうしたら	479
28	あるいは	473
28	まず	473
30	さらに	448

	シナリオ	出現数
1	でも	227
2	だから	145
3	じゃあ	84
4	それで	69
5	だって	62
6	しかし	37
6	で	37
8	けど	35
9	それから	31
10	それに	30
10	だけど	30
12	それでは	28
13	そうしたら	27
13	では	27
15	とにかく	25
16	そして	23
17	それが	15
18	って	14
19	それでも	13
19	それなら	13
19	ただ	13
19	ところが	13
23	つまり	11
24	ですから	9
25	まず	8
25	結局	8
25	とくに	8
28	それなのに	8
29	あと	7
29	さて	7
29	それにしても	7

	(参考) 講義	出現数	11	たとえば	40	22	そこで	15
1	で	1108	11	ただ	40	23	と	12
2	それから	251	13	そうすると	38	24	また	12
3	そして	146	14	では	37	25	ということで	11
4	つまり	99	15	しかし	34	26	というか	10
5	だから	80	16	じゃあ	31	27	とくに	9
6	んで	53	17	あるいは	28	28	それが	9
7	でも	51	18	あと	24	29	さらに	8
8	ところが	49	19	それでは	22	30	そんなふうに	8
9	ですから	48	20	まず	18	31	けれども	8
10	それで	43	21	それにたいして	18	32	ただし	8

社説、コラム、論文、エッセイ、小説、シナリオ、講義を比較してまず気づくことは、講義をのぞき、接続表現の1位が逆接の接続表現であることである。多くのジャンルにおいて、接続表現による談話展開の主流は逆接である様子がうかがわれる。

一方、講義では、「で」が接続表現の多くを占める。「で」は、その位置づけがかなり難しい接続表現であるが、「それで」に準じて順接の接続表現と考えると、平川(1991:98)が指摘する「順接、及び因果の接続詞が多く、逆接が少ない」という講義の接続表現の特徴と一致する。つまり、講義のみ順接基調、講義以外は逆接基調であると言える。

しかし、社説、コラム、論文、エッセイ、小説、シナリオが共通して逆接基調といえるかということ、若干問題がありそうである。10位まで見てみると以下のようなになる。

- 社説：1位「しかし」、2位「だが」、6位「ところが」、7位「ただ」
- コラム：1位「だが」、2位「しかし」、3位「ただ」、6位「でも」、8位「ところが」、10位「それなのに」
- 論文：1位「しかし」
- エッセイ：1位「しかし」、3位「だが」、4位「ところが」、7位「でも」
- 小説：1位「しかし」、3位「だが」、6位「でも」、8位「ただ」
- シナリオ：1位「でも」、6位「しかし」、8位「けど」、10位「だけど」

論文では、逆接の接続表現のうち上位十傑に入るのは「しかし」に限られる。多いのは、2位「また」、3位「そして」、4位「さらに」といった添加や列挙を表す接続表現である。これは、講義の接続表現に近い分布である。

講義については、先ほど順接基調と述べたが、現実には添加を基調としていたほうがよいだろう。接続表現の「で」は、順接というよりも、講義者が準備した計画にそっ

て話を加えていく進行を表しているからである（高橋 2001）。また、講義の 2 位は「それから」、3 位は「そして」といずれも添加の接続表現が占めている。つまり、加算的進行を基調とするのが、学術的な文章の特徴と見たほうが現実に近いと思われる。

また、逆接の接続表現の場合、省略されにくいという特徴がある（市川 1978:70-80）。添加や同列の接続表現の場合、省略されても文意が通ることが多いため、省略されることが多い。一方、逆接の接続表現の場合、省略してしまうと読者に違和感を与える展開になってしまうことが多く、省略しにくいことが多い。そのため、接続表現だけで見ると、添加や同列の接続関係よりも、逆接の接続関係が多く出てしまうのである。したがって、接続表現の総数だけでその文章の性格を判断するのは危険であるといえる。

とはいえ、社説、コラム、エッセイ、小説、シナリオの五つのジャンルで逆接の接続表現が 10 位以内に三つ～六つ入ったという事実を過小評価すべきではない。これらのジャンルには、書き手や話し手としての私が顔を出すという共通の特徴がある。私らしさを出すためには、私と異なる意見をあらかじめ提示し、それに反論するスタイルを取るというのが一つの有力なレトリックであり、それが逆接の接続表現の多用につながったものと見こまれる。

また、接続表現は文章・談話の構成や展開を表す指標であり、接続表現の頻度が近似的な分布を示す文章・談話は、ジャンルの構成や展開が近いことを示すと考えられる。

その意味で、すでに指摘したとおり、論文と講義という学術的な内容を備えた文章・談話は、接続表現の頻度の分布が似ており、両者の関係は近いと見なせそうである。また、「しかし」「だが」が上位二つを占め、「ただ」「ところが」など逆接の接続表現がことさら目立つ新聞の社説とコラム、「しかし」「そして」「だが」という上位三つが共通し、「だから」なども上位に入るという意味で、接続表現の分布が似ているエッセイと小説もまた、それぞれ比較的近い関係にあるジャンルであることがわかる。

なお、「でも」「だから」「じゃあ」「それで」「だって」などの即興的・感覚的な接続表現が上位を占めるシナリオは他のジャンルとは明らかに異なっており、今回対象にしたジャンルでは唯一の対話でもあり、独自性の強いものであることがわかる。

4. おわりに

4.1 本調査のまとめ

以上、①総文数にたいして何%ぐらい接続表現が用いられているか、②個々の接続表現の形式がそれぞれいくつ使われているか、という二つの観点から接続表現を論じてきた。

総文数にたいする接続表現の頻度は、もっとも高い講義で 3 分の 1 強、つぎに高い論文で約 4 分の 1 と、この二つは比較的頻度が高かったが、残るジャンルはだいたい 10% 台の前半であり、新聞のコラムのように 10% を切るものもあった。なお、対話であるシナリオは 3% ととりわけ接続表現の数が少なかった。

また、個々の接続表現の種類ごとの頻度をジャンル別に見ると、講義を除くどのジャンルにおいても、もっとも多く使われていたのは逆接の接続表現であった。しかし、新聞の社説やコラムなどは逆接基調が強いのにたいし、他のジャンルはこの二つほどは逆接基調が強くなかった。

さらに、接続表現の頻度の分布から、論文と講義、社説とコラム、エッセイと小説が、文章・談話の構成や展開という点で近い位置にあることがわかった。

4.2 今後の可能性と課題

21世紀に入り、言語の記述的研究が、内省による研究からコーパスによる研究へとその軸足を移しつつある。内省によって文法性判断がつく問題については、すでにかかなりの程度まで記述が進んでおり、ネイティブ・スピーカーが直感ではわからない問題を、定量的に解決できるコーパス研究が次世代の研究として脚光を浴びているからである。

接続表現もまた、ネイティブ・スピーカーが内省による判断をしても、わからないことが多い。とくに、本調査のようなジャンル別の頻度は、コーパスを使わないと、判断を誤ってしまうおそれ強い。その意味で、日本語学習者に接続表現を適切に教授するための基礎資料として、本調査が果たしうる役割は決して小さなものではないと考える。

一方、本稿のなかでも触れたように、接続表現に現れない接続関係が、現実の文間の接続関係の多くを占める。しかし、形態に現れない問題は、コーパス研究では扱いにくいところがある。そのような意味的接続関係をどう記述するかという問題は残ったままである。そうした問題を今後どのような道筋で解決していくかが、研究が次の段階に入るための大きな課題となるであろう。

参考文献

- 石黒圭(2007)「講義の談話の接続表現」西條美紀(研究代表者)『学際的アプローチによる大
学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』pp.54-63、2004~2006 年度科学研究
費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書
- 市川孝(1965)「接続詞的用法をもつ副詞」『国文』24、pp.1-7、お茶の水女子大学国語国文学
会
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』pp.969-986、明治
書院
- 佐久間まゆみ(1990)「接続表現(1)(2)」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(編)
『文章・談話のしくみ』pp.12-33、おうふう

- 佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要』41、pp.9-22、
日本女子大学
- 高橋淑郎（2001）「談話における接続詞『で』の機能」『国語学会 2001 年度春季大会発表予稿
集』pp.132-139、国語学会
- 田中章夫（1984）「4 接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日
本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』pp.81-123、明治書院
- 中村明（1973）「接続詞の周辺—同帰に属する語の文法的性格」『ことばの研究』4、国立国語
研究所
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法7 第12部談話 第13部待遇表現』くろし
お出版

付記

本研究は、2006～2008 年度科学研究費補助金（若手研究(B)：課題番号 18720136）石黒圭
（研究代表者）『作文教材開発のための「談話展開指標」の研究』の助成を受けたものである。

（いしぐろ けい 留学生センター准教授
あぼ きみえ 言語社会研究科博士課程
さがわ さちよ 言語社会研究科修士課程
なかむら さやこ 言語社会研究科修士課程
りゅう よう 言語社会研究科博士課程）